

レター
フ
ロ
ム
マ
イ
フ
ア
ー
ザ
ー

大
沢
ケ
イ
ト

人物表

辻 優真（37） 育休中の会社員

松崎 美葉（35） 小料理屋「小奴」女将

高倉 三紗代（62）（31） 会社員

田中 星亜（21） 元キャバ嬢

森澤 裕司（67）（36） 優真の父

辻 さやか（32） 優真の妻

廣田 瞬（47） キャバクラのオーナー

埴 畑（60） 「小奴」の客

柿 崎（51） 「小奴」の客

沢 木 和子（61） 函館市文学館館員

萩原 真理子（71） 旧函館区公会堂職員

内田 良太（声のみ）（37） 優真の友人

カメラマン

松崎 佳代（101） 先代の「小奴」女将

神戸在住の会社員・辻優真は父の遺品の中に未投函の手紙を見つける。それは函館の女性・高倉三紗代にあてたものだった。興味本位で読んだ優真は「私たちの子どもは元気か」との一文に衝撃を受ける。一人っ子のはずの優真は亡き父の子どもの存在を確かめに函館に飛ぶ。三紗代の住んでいた住宅はすでに無く、優真は父の手帳に書いてあった「小奴」という店を探す。友人宅に泊まるため、隣家の田中星亜から鍵を借りようとすると、星亜は勘違いをして逃げ出す。誤解はとけたが身重の星亜は走ったため、腹痛を起こし、優真は病院まで付き添うことに。優真の優しさに星亜は「小奴」へ案内する。「小奴」の女将・松崎美葉は三紗代という女性を知らなかったが、常連客の父親のアルバムを手掛かりとしてだんだん三紗代に近づいていく。また優真と美葉は惹かれあっていく。しかし、やっと探し当てた三紗代が語った優真の父・裕司の真実は優真にとって受け入れがたいもの

だった。父・裕司は優真が幼い頃に実両親の事業の失敗で億の借金をしよい込むことになり、精神的に追い詰められて函館の地で死を選ぼうとしていた。そこで同じく死のうとしていた三紗代と出会う。親しくなった二人は自由に生きようとし、裕司は三紗代に女性のように過ごしたい気持ちを打ち明け、三紗代は受け入れる。精神の自由を手に入れた裕司は本州の家族に別れを告げるが、妻から送られてきたのは優真愛用の折れたクレヨンだった。思い直した裕司は三紗代と本当の自分に別れを告げ、家族の元へ帰ったのだった。父に許せない気持ちを抱く優真に三紗代は「クレヨンを食べてしまえば帰らずにすんだ」と言う。三紗代は女として生きてかかった裕司を男として愛してしまい「理解してあげられなかった」と死んだ裕司に詫びる。優真は父の秘密を抱えたまま、美葉に惹かれつつも函館を後にするのだった。優真が去った後に折れたクレヨンが一つ転がっていた。

○神戸港・全景

夏。

停泊中の船が見える。

○住宅街の坂道

セミの音が響く中、辻優真（37）が

汗を流しながら坂道を登っている。

手にはスイカの買った袋。

○森澤裕司の家・玄関前

古びた一軒家。玄関脇にゴミ袋に詰め

たガラクタが積み上げている。

優真、引き戸を開けて中に入る。

○同・玄関内

優真、入ってくる。

優真「ただいま」

上がりかまちにスイカを置き、腰かけ

て一息つく。

背後を振り返る。シンとしている。

優真、腰かけたまま考えている。

○和室

机に白布をかけた祭壇の上に森澤裕司

(67)の遺影が飾られている。

優真、スイカの入った袋を掲げて、

優真「スイカ買ってきたで。おとん、好きや

ったやろ。一緒に食べよな」

○ダイニング

風鈴が鳴っている。

優真がテーブルに広げた新聞紙の上で、

豪快にスイカにかぶりついている。

優真「うめえ、生き返る」

テーブル上に置いたスマホのテレビ電

話に辻さやか(32)が映っている。

さやかの声「ちょっと優真」

背後から赤ん坊の泣き声。

優真「華く、泣いとるな」

さやかの声「朝から泣きっぱなしやし、かな

わんわ。そっちどうなん？ なに悠長に

スイカなんか食べてんの」

優真「おとんの好物。追悼や」

さやかの声「ええなあ。なあ、華。パパばっ

かりスイカ食べて」

優真、汗を拭いて、

優真「しかし暑いわ」

さやかの声「エアコン効いてんの？ まだ電

気通ってるのやる？」

優真「ついてるで」

さやかの声「片付け、今日中に終わる？」

優真、うんざりした顔で

優真「今日中？ 無理無理。来てみ、すごい

から」

さやかの声「すごいってお宝でもあるん？」

優真「あるわけないやん」

○和室

ところ狭しと本が置かれている。押し入れの中にも本が山積みになっている。

○ダイニング

口の周りをティッシュで拭く優真。

優真「本。めっちゃあるわ」

さやか「本？」

優真「他にも何や書類とか手紙とか」

さやか「お義父さん、本読む人やってんや。

意外。野球しか興味ないんかと思ってた」

優真「それな」

さやかの声「業者頼む？」

優真「せやから言うたやんけ、おまえが金が

もったいないって」

さやかの声「せやかて、百万はかかるで」

優真「無理やな」

さやかの声「お気張りやす。サボらんといて

や」

優真「サボるか。ワンオペやで」

さやかの声「ワンオペはこっち。(赤ん坊の

泣き声)ええから、早よ帰ってきてな。

あくまでも育休なんやから、お義父さん

とこの片付けのためちゃうねんで」

優真「わかってるって。少しでも早くこの家を売却するために片付けがんばってんねん」

さやかの声「ほんまに売れんの、その家。だ
いぶ古いけど」

優真「わからん。まあ、華のオムツ代くらいにはなるやろ」

さやかの声「ミルク代も出たらええなあ」

優真「まかせとき。適当にやって帰るわ」

テレビ電話、切れる。

優真、スイカの種を飛ばす。

○和室

押し入れの前にヒモで縛った本がたくさん積み上げてある。

優真、押し入れの中から新たに本の山を引っ張り出す。

優真、汗を拭きながら

優真「あゝ、しんど。こんなにようさん、よう溜め込んだなあ。本屋か。本、本、本、

本。本！（押し入れにもぐりながら）金
目のもんでもあればやなあ」

優真、古びた缶箱を引っ張り出す。

優真、まじまじと見る。

× × ×

缶箱の中に古い手紙と使い込んだ手帳。

奥から古いクレヨンの箱が出てくる。

。

優真（名前を見て）待って。懐かしー。俺の

クレヨンやん」

クレヨンの箱を開ける優真。

全て折れているクレヨン。

赤のクレヨンが無い。

優真「全部折れてる。クレヨン、片っ端から

折れてまうねんな。赤、無いなあ。」

優真、口元をほころばせる。

× × ×

優真、開封された封筒に息を吹き込み、

次々、中を覗き込む。

優真「札でも入ってたらええんやけど」

一つの封筒の中から便せんを引き出し
広げる。と、一万円札が舞い落ちる。

優真「拾って）ラッキー！（札にキスする。

封筒の差出人を見て）池田さん、ありが
とございます！」

いそいそと札を財布にしまう優真。

機嫌よく、他の封筒の束を手にとる。

封筒が一つ滑り落ちる。

その封筒を拾う優真。

優真「開いてへん」

宛先は「函館市の住所と高倉三紗代
様」。

優真、封筒をひっくり返す。

差出人は森澤裕司。

優真「おとんから函館の高倉三紗代様宛」

優真、封筒をじっと見る。

優真「もしかして、これって函館の女……」

優真、封筒を開けようとして止める。

優真「やめとけ。今さら。おとんももう死ん
でるんやし」

優真、封筒を放り出し、別の作業を始める。

が、気になって封筒に目をやる。

○優真の家・ダイニング（夜）

優真がパジャマ姿でビールを飲んでい
る。

視線の先にテーブルに置かれた高倉三
紗代宛の封筒。

パジャマ姿のさやかが寝室の襖を閉め
てやってくる。

さやか「やっと寝たわ」

優真「お疲れ。ビール飲む？」

さやか「飲む。（冷蔵庫からビールを出す。

封筒を見て）なに？」

優真「これな。おとんのラブレター」

さやか「えっ」

優真「かもしれない」

さやか「どういうこと？」

優真「住所見て」

さやか、封筒をとり、

さやか「北海道函館市〇〇 高倉三紗代様」

優真「うちのおとんとおかんが離婚した理由

が」

さやか「うん。え、もしかして」

優真「函館の女なんよ」

さやか「この人ってこと？ え、でもここに

あるってことは」

優真「出すのを思いとどまったんやな」

優真とさやか、封筒をじっと見る。

優真、封筒に手を出す。

さやか、その手を止める。

優真、さやかを見る。

さやか「やめとき。知らん方がいいこともあ

る」

優真「せやな。もしラブレターやったりした

ら、ちよつとかなんしなあ」

さやか「わー、かなん、かなん」

赤ん坊の泣き声。

さやか、立って寢室へ。

さやか「華？」

×

×

×

さやか、戻ってくる。

優真、真剣な顔で手紙を読んでいる。

さやか「読んどるやないかい」

優真、顔を上げて

優真「さやか。俺、函館行ってくるわ」

さやか「は！？ 何言うてんの？ 函館？」

優真「俺に義理の兄弟がおるらしい」

さやか「義理の兄弟？」

優真「か、姉妹」

さやか「ヤバ、鳥肌立ったんやけど。どうい

うことか説明して」

優真、手紙を指し示して

優真「ここ読んで」

さやか「僕らの」

優真『僕らの子どもは大きくなりました

か？』

さやか「子ども。お義父さんにこの高倉さん

との間に子どもがおる……えええ」

さやか、優真を見る。

優真「あの家、しばらく売れんようになる」

さやか、目を丸くして

さやか「え、なんで？」

優真「相続。おとんの財産ってあの家と少しの預金だけやけど、義理の兄弟おるんなら、そいつにも権利あるし」

さやか「いらんやろ、古家なんか」

優真「それでもや。せやから函館行くわ」

さやか「どうしても行かなあかんの？ 私立

探偵雇うとか。なんか方法ないの？」

優真「あほ、探偵なんかいくらかかるか」

さやか、信じられない顔で

さやか「函館って。北海道やん」

優真「そやで」

さやか「そやでって。その間、私、ワンオペ

やん。あんた、育休中なんやで。バカ

スチャウねんで！」

優真「ほんまになあ。しんどいけど仕方ない

な」

さやか「あなた……ほんまは喜んでるやろ」

優真、首を振る。

さやか、テーブルを叩く。

赤ん坊が泣きだす。

○空

白雲の中を飛行機が飛んでいる。

○飛行機・内

優真、窓際の席に座り、機嫌よく外を眺めている。眼下に函館山が見える。

○函館空港・前

飛び立つ飛行機が見える。

優真が出てきて、ポーズする。

優真「函館やー！ー！」

大きく伸びをするが気づいて

優真「なんてのんびりしてられん」

優真、電話をかける。

優真「もしもし良太？俺。今、函館着いた

とこ。助かるわ、泊まるとこ提供して
らって。何時に東京から戻るん？ど
こ
で待ち合わせしたらええ？」

良太の声「それがな優真。ちよつと仕事
がト
ラブってて。今日東京から戻られへん
ね
ん」

優真「え！マジで？俺、お前のところ、
泊まるって当てにしててんけど」

良太の声「それは大丈夫。俺、出張中、い
つ
も隣の女の子に猫のエサやり頼んで
るか
ら、その子に鍵もらって。連絡しとく
か
ら」

優真、スマホ片手に無然とした顔。

○同・タクシー乗り場

スーツケースを持った優真が急ぎ足で
やってくる、停車中のタクシーに乗り
込む。

○タクシー車内

タクシー運転手にメモを渡す優真。

優真「おっちゃん、この住所に行きたいんや

けど、わかる？ ちよっと急ぎで」

運転手、じっと優真を見て、黙って車を発進させる。

○道

函館競馬場の横を通り過ぎるタクシー。

自衛隊車両とすれ違う。

優真「おお、自衛隊や」

○タクシー車内

函館の景色に目をやる優真。

眼前を流れていく車窓の景色。

○道路

「谷地頭行き」市電が車と並走している。

○タクシー車内

珍しそうに市電を見ている優真。

優真「おおー、路面電車や。ええなあ」

○市電・内

高倉三紗代（62）が花を持ち、座っている。

窓の外に目をやる。タクシーに乗った優真と目が合う。会釈する優真。

○タクシー車内

市電の中の三紗代が会釈する。
前を向く優真。

優真「はしゃぎすぎやな、俺。恥ずかしい」

○市電「谷地頭」駅

花を持った三紗代が電車から降りる。

○坂道

花を持って坂道を歩く三紗代。

○墓地

高台から海を見下ろす墓地。

墓の前で拜んでいる三紗代。

花が活けてある。

三紗代、立ち上がると墓石を見つめる。

三紗代、海を振り返り、じっと見つめ

る。

○良太のマンション・外観

タクシーからスーツケースを持った優

真が降り、マンションを見上げる。

メモを取り出し、メモの住所と看板を

見比べる。

優真「良太、ええとこ住んでるやん」

○同・外廊下

602号室の前に封筒を持った優真が立

ち表札を見ている。

表札に「内田」とある。

優真「内田良太くん、602号室、のお隣さ

ん」

隣の603号室の表札には「TANAKA」とある。

呼び鈴を鳴らす優真。

田中星亜（21）が帰ってきて、優真に気づき、足を止める。

優真が星亜に気づく。

優真「こんにちは。この部屋の人？ えっと

話、聞いているかな」

星亜、首を振りながらあとずさりする。

優真「あ、聞いてない？」

星亜、踵を返し非常階段を走り降りる。

優真「！ ちょっと待って。鍵を貸してほし

いねん！」

優真、スーツケースを持ち、後を追って非常階段を降りる。

○マンション・前

走り出てきた星亜、左右を見て、逃げていく。優真、スーツケースを持ち、

やっこのことで追いかけてくる。

優真「ちょっと待って。マジで」

優真、星亜を追いかけていく。

○公園

優真、星亜に追いつき、腕をつかむ。

抵抗する星亜。

星亜「はなして」

優真「ちゃうって。ごめん、逃げんといて」

星亜、優真の関西弁に気づき、抵抗をやめる。

優真「なんや勘違いしてへん？ 俺、隣の内

田良太の知り合いなんやけど」

星亜「内田さんの？」

優真「聞いてない？ 俺のこと？」

星亜、首を振る。

星亜のスマホに電話かかってくる。

星亜「(出て)はい、星亜です。あ……お友達、

ツジユウマさん」

優真「辻優真です！」

星亜「はい、今会いました」

優真、ホッとする。

星亜「はい、あ、鍵。わかりました」

星亜、スマホを切り、うなづく。

優真「わかってくれた？」

○マンションの外廊下

星亜、自分の部屋から出て来て、優真に鍵を渡す。

優真「ありがとう。感謝」

星亜「勘違いしてごめんなさい」

優真「ええねん、ええねん。じゃ！」

優真、良太の部屋に入る。

○良太の部屋・玄関

優真、玄関から部屋にあがる。

優真「おじゃまします」

玄関ドアが開き、星亜が入ってくる。

優真「え！？」

星亜「猫の、まだご飯あげてない」

優真「猫？」

○同・リビング

猫が餌を食べている。

微笑んで眺める星亜。

優真、荷物を片付けながら

優真「猫の世話くらい俺がやるよ」

星亜「やらせてほしいんです。私、他に仕事してなくて、貴重なバイト代なので」

優真「学生さん？」

星亜「首を振って」キャバで働いてて、でも（お腹に手を当て）子どもができたんで、お酒がちよっと」

優真「そうなん：：え、子どもって、さっき、階段駆け下りたりして大丈夫やった？」

星亜「はい、（お腹に手を当てたまま）あまり良くないとは思うけど、大丈夫みたい」

優真「ごめんね。お茶とか飲む？ 人んちやけど。ちやう、あんまりのんびりしてられんかった」

星亜「お仕事ですか？」

優真、ちよつとためらうが封筒を差し出す。

星亜、受け取って見る。

優真「この人探してんねん」

星亜「高倉美佐代さん」

優真「まさか、知らんよなあ。グーグルマップで見たんやけど、この住所にこの家、もう無いっぽくて、あ、じゃあ、そっか。もう一つだけいい？『しょうど』っていう店は聞いたことない？」

星亜「しょうど？　どんな字？」

優真、父親の古い手帳を出して開く。

優真「この手帳に書いてあるんやけど、小さいに女に又って書いて」

星亜「小さい、女、又。こ、やっこ？」

星亜、警戒しだす。

優真「小奴（こやつこ）って読むんか。たしかに奴さんやな！　知ってるん？」

星亜、優真を見て

星亜「その人、見つけてどうするんですか？」

優真、星亜を見る。

星亜「なぜこの女の人の、探してるんですか？」

ひよっとしてストーカーですか？」

優真、あわてて

優真「そんなんちゃう。この人、高倉さんは

その、俺の親戚かもしれんねん」

星亜「親戚なのに居場所知らないんですか？」

優真「せやねん。小奴、知ってるなら教えて

ほしい。ネットで引っかからんねん」

星亜、優真をじっと見て

星亜「なんか隠してるっぽい。私、そういう

の鼻が利くから。あなた、詐欺師？」

優真「詐欺師？　はあ？」

星亜、優真をにらむと部屋を出て行く。

優真、むかついた顔をするが、星亜を

追いかけていく。

優真「もし何か教えてもいいよって気になっ

たら、ここに……」

星亜、腹を押さえうずくまっている。

かけよる優真。

優真「ちよっと！　大丈夫？」

優真、星亜を助け起こす。

星亜、優真を押しつけようとする。

星亜「大丈夫です」

優真「大丈夫ちゃうやん」

星亜、腹を押さえうなっている。

優真、あわてて辺りを見回し、スマホを取り出して電話をかける。

優真「すみません、救急車お願いします。女性
性が倒れました」

○病院・外観

○同・処置室・外

優真、ベンチに座っている。

看護師が来て、優真に話しかける。

○同・処置室・内

星亜、ベッドに寝かされ点滴につなが

れている。優真、横の椅子に腰かけている。星亜、目を覚まし、優真に気づく。

○タクシー車内（夜）

後部座席に優真と星亜が乗っている。

優真、電話している。

優真「いや、まだちょっとつかめてないねん。

わかってるって。はいはい、感謝してますよ。ほんまごめん。ごめんなさい、さやかちゃん。ほんま、ごめんて」

無然とした顔で電話を切る優真。

優真「あゝ、腹減った。なんか食べてく？」

星亜「ごめんなさい、私のせいで。貴重な時

間を」

優真「いや、そんなん。困ったときはお互い様やし。気にせんでええって」

星亜「あと、詐欺師とか言っでごめんなさい。

いい人ですよね」

優真「ええねん。お世辞言わんでも」

星亜「さっきの奥さん？」

優真「うん。そう」

星亜「怒ってるんだ」

優真「うん、ほんまは僕、育休中なのよ。なのに赤ん坊を彼女に任せっきりで函館来てるから頭あがらんねん」

星亜「(運転手に)運転手さん、すみません、行先変更して〇〇(繁華街)まで」

優真、驚いて

優真「え、なに？」

星亜『小奴』知ってるから案内する」

優真、驚きつつ喜ぶ。

優真「うれしいけど何で急に？」

星亜「自分のこと放り出してまで、私に付き添ってくれたり、奥さんのことも、ちゃんと考えてるみたいだったから」

○道(夜)

走行するタクシー。

○小料理屋・外観（夜）

走り去るタクシー。

「小奴」の看板を見上げる優真と星亜。

灯りがついている。

優真は引き戸を開け、店に入る。

優真「こんばんは」

続いて入る星亜。

美葉の声「いらっしやい。お二人？」

○同・中（夜）

カウンターのの中の女将・松崎美葉（3

5）、入ってきた二人を見て、驚きの声

をあげる。

美葉「星亜！」

星亜、バツが悪そうに

星亜「美葉さん。お久しぶりです」

うれしそうな顔の美葉。

二人の顔を見比べる優真。

×

×

×

優真と星亜の前に湯気の出た料理が出

される。

優真 「え、二人は前から知り合い？」

星亜 「うなずく。」

星亜 「前に働いてたお店の知り合いで」

美葉 「そう。星亜のお店のオーナーと私がいい仲で。よく星亜と他の子連れて食べに来てくれて。もう別れたんですけどね」

優真 「へえ」

美葉 「冷めないうちにどうぞ」

優真 「生唾を飲み込み、割り箸を割って食べ始める。ビールも飲み、

優真 「うまい。(星亜に) 食べ、めっちゃうまいで」

星亜 「知ってる」

美葉 「微笑んで

美葉 「ありがとうございます。お客さんは大阪の方ですか？」

優真 「神戸です。いや、うまい。函館最高」

美葉 「わあ、うれしい」

優真 「(星亜に) 食べて。奢るから」

星亜、美葉を見る。

美葉「気にしないで。食べて」

優真、不思議な顔で二人の顔を見る。

星亜、うなずいて食べる。

星亜「あ、やっぱ、おいしいわ、美葉さんの

料理」

優真「やろ？」

美葉「ありがとう！」

優真、微笑む美葉と目が合う。

優真、照れて目をそらす。

美葉、笑顔。

×

×

×

美葉、封筒の宛名を見て首をひねる。

美葉「高倉三紗代さん。知らないなあ。この

方、ここで働いてたの？」

優真「手帳を出して」いや、ここで待ち合わせ

せて書いてあるんですよ。せやから店

の人ちゃうくてお客さんですね」

美葉「お客様。それじゃあますますわからな

い。お義母さんなら知ってたかもしれない

いなあ。この店、お義母さんから引き継いだんですよ」

優真「その方は今どこに？　電話で話せませす？」

美葉「それがね」

○特別養護老人ホーム

外観

○同・居室

先代の「小奴」美葉・松崎佳代（101）がベッドで目を閉じている。

美葉の声「お義母さん、もう百歳を超えてるから、お元気なんだけど、話したりはちょっと難しいかも」

○小料理屋「小奴」店内（夜）

がっくりする優真。

食べながら優真をチラ見する星亜。

優真「ま、むつかしいのはわかっててんけど

なあ。やっぱ探すのは無理かあ」

美葉「だいぶ古い手紙みたいだけど、何か訳

あり？」

星亜も優真を見る。

優真、うなずいて

優真「(封筒を示して)この高倉三紗代さん、
言う女性と死んだ僕の父親の間に子ども
がいたかもしれんです」

美葉「あらま」

優真「僕ね、小さい頃に両親が離婚したんで
すけど、なんでおとんと離婚したん？
って母親に聞いたときに「函館の女のせい」
って聞いた記憶があって。聞いたのそれ、
一回切りなんすけど。ずっと忘れてて、
この手紙を見た瞬間、母の言葉がパアッ
とよみがえってきたんすよ」

美葉「函館の女」

優真「おとんとこの人の間にどんなことがあ
ったのか、まあ今更、父の昔のロマンス
に目くじら立てるつもりは無いんやけど、

義理の兄弟がいるとなると」

同じカウンターで飲んでいた柿崎（5
1）が話に入ってくる。

柿崎「相続とか厄介だよね。いやウチもね、
死んだじいさんにフィリピンに隠し子が
いることが判明して大変でしたよ。しか
も三人もいたんだ」

美葉「へええ！ 柿崎さんとこのおじいちゃ
ん、そうなの。見かけによらないね」

柿崎「全く罪深いことをするよね」

優真、手帳をめくって美葉に見せる。

優真「このカミシモバタケさんもよく名前が
出てくるんですけど。あとムクゲって」

美葉「カミシモバタケ？」

優真「読み方がちょっとわかんなくて。土偏
にカミシモ」

美葉「峠の山が土になった字？」

柿崎「（のぞいて）ああ、こりゃタオハタだ」

美葉「え？」

柿崎「タオハタだよ。土偏にカミシモの一字

でタオって読んだよ。それに畑でタオ
ハタ」

優真「タオハタ。ありがとうございます」

美葉「柿崎さん、物知り」

柿崎「物知りじゃないよ。タオさんの苗字だ
から」

美葉「へ。タオさんてタオハタさん？」

柿崎「知らなかったの？ タオさん、美葉さ
ん目当てに通ってるのに、名前もちゃん
と覚えられてないって知ったら泣いちゃ
うよ」

美葉「いやだ。そういえばタオさん、一カ月
くらい姿見てないの。いつも今くらいの
時間になると来てたのに」

柿崎「埤畑って苗字も珍しいよなあ。（優真
をさして）タオさんとこの人、そんなに
年齢変わらなさそうだし、案外、タオさ
んの父親とか知ってるかもなあ」
ガラッと戸が開いて、埤畑（40）が
入ってくる。

埤畑「お久しぶり」

柿崎、驚いて

柿崎「タオさん！」

優真「え、タオさん？」

美葉「タオさん！ ナイスタイミング」

優真、立ち上がり、埤畑に握手を求め
る。

埤畑「あ、どうも。なになに、なんでこんな
大歓迎なの？」

美葉「タオさんの噂してたところだったのよ」

埤畑、ニコニコして

埤畑「そうなの？　うれしいなあ」

美葉「タオさん、ビール？　お久しぶりね！

忙しかったの？」

埤畑「うん、ビール。それがさあ、大変だっ
たのよ。親父が急に死んじゃってさあ」

全員、黙って埤畑を見る。

埤畑「え？」

美葉「ちよっと待って。ショック」

優真、頭を抱えて座る。

柿崎「タイミング悪いなあ」

埤畑、驚いた顔で

埤畑「え、うちの親父、そんなに人気者だったの？」

たの？」

○同・二階（夜）

階段を上がる足音。

真っ暗な部屋に灯りがつくと、美葉と

優真。

美葉「狭くて悪いけど、もう足が危ないから」

優真、完全に酔っぱらっている。

美葉、押し入れを開けて布団を出す。

優真「あ、美葉さん。やりますやります」

美葉「いいのいいの、酔っぱらいは座ってて。

ずっとこの部屋使ってたからカビ

臭いかなあ」

美葉、布団に顔をうずめて嗅いでみる。

優真がそばにきて布団に顔をうずめる。

驚く美葉。

優真「あ、ぜんっぜん、大丈夫」

美葉と優真、協力して布団を敷く。

手が触れ、恐縮する二人。

美葉「奥さん」

優真「はい」

美葉「いる？」

優真「一応、はい」

美葉、優真の顔を見つめる。

優真、美葉の顔を見つめる。

美葉「そうなんだ、残念」

美葉、微笑んで、一礼して去る。

美葉「ごゆっくり」

優真、美葉が閉めた襖に向かい、正座

して頭を下げる。

優真「お世話になります」

優真、布団に倒れ込み、じたばたする。

鳴り出すスマホ。

優真、飛び起きて

優真「はい。あ、うん。今、良太の家。うん」

○同・店内（夜）

ガランとした店に星亜が一人。

美葉が二階から降りてくる。

美葉 「行きましようか。狭くて悪いんだけど」

星亜 「いいの？」

美葉 「いいよ？」

○道（夜）

連れ立って歩く美葉と星亜。

美葉 「それにしても久しぶりだよね。来てくれてありがとう。うれしかった」

星亜 「ずっと気になってて」

美葉 「そうなの？ 来てくれたらよかったのに」

星亜、立ち止まって

星亜 「オーナーと、廣田さんとあんなことになって、美葉さん、すごい嫌な思いしたでしょ？ だから私の顔見たら嫌なこと思い出させるんじゃないかって」

美葉、星亜をじっと見て

美葉 「そんなに気にしてくれてたんだ。あり

がとう。星亜、優しいから。でも星亜、
廣田のこと好きだったんじゃないの？」

星亜、首を振って

星亜「私、オーナー大嫌い。自分の言いなり
にならないからって美葉さんにつきま
って最悪。もう店も辞めたから」

美葉、微笑んで星亜の肩を抱く。

歩き出す二人。

美葉「あの人とは知り合い？ 優真くん」

星亜、首を振る。

星亜「知り合いつていうか、知り合いの知り
合いでよく知らない人」

美葉「そうなの？」

星亜「小奴に行きたいって言うから、最初は
警戒してたの。怪しいやつって。でも親
切。私が体調悪くて、病院まで付き添っ
てくれて。人探して忙しいのに」

美葉「そうなの。優しいね、優真くん」

星亜「うん。え、美葉さん、ひよっとして惚
れた？」

美葉、驚いて

美葉「え、ちよつと待って。今日会ったばっ

かよ」

星亜、美葉をチラッと見てニヤニヤして歩いていく。

うれしそうな美葉の顔。

美葉「相変わらず鋭い。かなわないなあ」

○「小奴」二階・和室（夜）

薄暗い部屋に窓から月明り。

優真は布団の上に寝転んでいる。

ため息をつき、寝返りを打つ。

起き上がる。

スマホが鳴動する。優真、電話に出る。

埤畑の声「優真くん？　ごめん、こんな夜中

に。埤畑です。寝てたよね」

優真「あっ、埤畑さん！　先ほどはありがとう

うございました。いえ、起きてます。ど

うかしましたか？」

×

×

×

スマホに「小奴」店内で笑顔を見せる
男女数名の古びた写真が映っている。

中心に裕司と三紗代。

顔が余りよくわからない。

じっと見る優真。

埤畑の声「気になって探したら、君のお父さ

んや高倉三紗代さんの名前が書いてある

写真があったから。同人仲間らしい」

優真の声「同人？」

埤畑の声「詩とかさ、短歌とか作ってたのよ、

うちの親父。そういえば同人誌も見せら

れたことあったんだけど、興味ないから

見てなかった。探してまた持ってくよ」

○「小奴」・正面（夜）

「小奴」を見上げる優真。

談笑する男女の笑い声が聞こえてくる。

目をつむる優真。

ポケットからスマホを出し、父と高倉

三紗代が映った写真を表示する。

じっと見る優真。

店の戸を開けて中に入る。

○同・店内（夜）

音を立てて引き戸を開け、優真が入ってくる。

廣田の声「おい」

優真、振り返ると道に廣田瞬（47）が立っている。

○同・前（夜）

優真、不審げな顔で店から出てくる。

廣田は優真をじろじろ見る。

廣田「あんた誰？」

優真「は？　なんですか、いきなり」

廣田「（答えず）美葉は？」

優真、黙っている。

廣田「美葉、どこだって聞いてんだよ」

廣田、近づいてくる。

廣田、いきなりパンチを優真の鼻先に

繰り出す。

驚いて固まる優真。

廣田「手出すなよ」

優真「は？」

廣田、優真から離れると去っていく。

優真「おい！」

啞然として見送る優真。

○タクシー車内

後部座席に美葉と星亜が並んで座っている。
いる。

美葉、うかない顔

星亜が眉間に皺をよせ、

星亜「オーナーだ、そういうことするの。あ

いつ、まだ美葉さん、あきらめてないん

だ、最悪。美葉さん、気をつけてね」

助手席の優真が振り向きながら

優真「オーナー？」

星亜「うちの店のオーナーで美葉さんの元彼」

美葉「別れ話してからしつこく付きまとわれ

て大変だったの」

星亜「美葉さん、監禁されたこともあったの」

優真「ヤバイヤツや」

美葉「それはごめん、私の勘違いで普通に鍵

開いてたの。だから監禁はされてない。

もうあきらめたと思ってたのになあ」

優真、何か話そうとするが

運転手「お客さん、目的地すぐそこなんだけ

ど、その道、一方通行だからぐるっと回

らなきゃいけないんですが、」

優真「あ、じゃあ、ここで降ります」

○道

八幡坂の上。

タクシーが走り去った後に、優真、美

葉、星亜が立っている。

○埵畑の家・正面

大きな一軒家。表札に「埵畑」とある。

美葉、見上げて

美葉「タオさんのお家、こんな立派なの。び
っくり」

引き戸を開け、こんにちはあと入って
いく美葉。優真、後に続こうとする星
亜を引き止めて

優真「昨日、「小奴」に連れてってくれてあ
りがとね」

星亜、優真を見てニヤツと笑い、家の
中に入っていく。優真も続く。

○ 同・客間

応接セットのソファに座る優真と美葉。

星亜はウロウロしている。

埤畑がアルバムと同人誌を持って入っ
てくる。

立ち上がる優真と美葉。

優真「埤畑さん、このたびは」

埤畑「(制して)もう、窮屈な挨拶は無し。こ
れ見て」

アルバムを広げる。

全員、貼られた写真を覗き込む。

美葉「あっ、お義母さん。これウチね」

埤畑「うちの親父は北大なんだけど、北大の

文芸サークルらしいですね、この集まり

は」

美葉「北大。お父様、優秀でらしたのね」

埤畑「ちなみに僕もです」

美葉「あら、すごい」

優真、腕組みして考えている。

美葉「優真さんのお父様もそういうご趣味を

お持ちだったの？」

優真「それが、思い出してるんやけど、まる

でそういう思い出がないねんなあ。もち

ろん北大、北海道大学でもないし」

美葉「お父様、映ってる写真ある？」

埤畑「待って」

埤畑、アルバムをめくる。

埤畑「これ」

埤畑の指さす写真に「裕司くん、送別

会」の付箋が貼ってある。

×

×

×

同人誌の最終頁、各同人の連絡先が書かれた頁が開かれている。

埤畑がスマホを耳にあてているが、

埤畑「ダメだね。もう何十年も前だから、誰

も連絡つかない」

優真「すみません」

美葉「あ、ちよつと待って。この人知ってる

かも」

星亜「え！ 美葉さん、すごい」

埤畑、優真、美葉の指さす写真を覗き

込む。

美葉「この人。お年は召してるけど、たぶん

そう」

写真には若き日の沢木和子と埤畑父、

他の面々が映っているが、裕司と三紗

代は映っていない。

○函館市文学館・外観

○同・館内

沢木和子（61）が懐かしそうに写真
を見ている。

沢木「ものすごく懐かしいです。よく私がわ
かりましたね」

美葉、微笑んで、うれしそうに後ろの
優真と星亜を振り向く。

優真「うちの父、森澤裕司をご存じですか？」

沢木、首をひねって、

沢木「ごめんなさい、私は存じ上げないです。
たぶん私が入会される前の方ではないで
しょうか」

美葉「じゃあ、この高倉三紗代さんは？」

沢木「写真をじっと見るが」ごめんなさい、
存じ上げないです」

落胆する三人。

× × ×

展示物の間を歩く優真、美葉、星亜。

優真、二人に振り向いて

優真「もうここまでにしようか。お世話かけ

てしまい申し訳ありませんでした」

星亜「いいの？ 兄弟を探さなくて？」

優真「それな。まあ勢いで函館まで来たけど、

正直、会うのが怖い気もしてきたわ。親父が三紗代さんと子どもを捨てて帰って来てる可能性もあるよなあ、とか」

星亜「それって今さらじゃない？」

美葉「私がもし高倉さんだとして、優真くんのお父さんの子どもを産んで、養育費もらわず苦労して育ててたとしたら、今頃何？ ってなるかもね」

優真、美葉の顔を見る。

沢木がやってくる。

沢木「あおう、実は「ムクゲ」の先輩に萩原さんという方がいらして、その奥様を知っているんですが、」

振り向く優真、美葉、星亜。

沢木「奥様が覚えてらっしゃいました、森澤裕司さんのことも、高倉三紗代さんのことも。三紗代さんの電話番号もご存知だ

そうです」

驚いて顔を見合わせる三人。

○旧函館区公会堂・外観

○同・二階ベランダ

函館の街が遠くまで見渡せる。

星亜が風に吹かれながら街を眺めている。ふとお腹に手を置く。

振り返って、優真たちを見る。

○同・大広間

職員の萩原真理子（71）が見学者を

案内し終わり、優真、美葉、星亜の元へ来る。

萩原「すみません、お待たせしてしまって。

私が萩原です」

優真「お仕事中すみません。函館文学館の沢

木さんからのご紹介で」

萩原、優真を見る。

口に手を当てて、

萩原「驚いた。ひよっとしてあなた森澤裕司
さんの？」

優真「息子です」

萩原「でしょう！　　そうでしょう。そっくり
だもの、あなた。お父さんに」

優真、美葉と星亜の視線に居心地悪そ
う。

優真「似てますか？　　僕はちっともそう思っ
たことなくて」

萩原「そうね。あなたは明るそうに見えるけ
れど、お父さんは静かな人で。お元気？」

優真「いえ、先月亡くなりました」

萩原、悲しそうに首を振る。

萩原「そう。残念。でもそういう年ですもの
ね、皆。で、三紗代さんだけど、最初に
お断りしておきますが、会えるとは限り
ませんよ」

優真「もちろんです」

優真、萩原に写真を渡す。

萩原、しげしげと写真を見て微笑む。

萩原「ああ、これ裕司さんの送別会。三紗代さん。これは埤畑さん、ここに映っているのが私の夫。懐かしいなあ。裕司さんが函館にいたのはほんの2カ月だったけれど、三紗代さんが連れてきたの。皆で短歌を作ったり、お酒を飲んだり楽しかったわ。映ってないけど私もいたんですよ」

萩原、顔をあげると

萩原「お写真、撮影させてもらいますね。三紗代さんに送って、あなたたちに連絡先を教えていいか聞いてみます」

写真をスマホで撮影する萩原。

萩原がスマホを操作している間、美葉は優真を誘ってベランダに出る。

○同・ベランダ

美葉、優真と連れ立ってベランダに出る。星亜、気づいて二人を見る。

美葉「だいぶ近づいてきたわね」

優真「そうっすね」

美葉「いいの？」

優真「いや、もうここまで来たら腹くくりま

すよ」

美葉「(ニヤニヤして)後悔してるんじゃない

の？」

優真「ま、でも、結果がどうあれ、美葉さん

に会えたしよかった」

美葉、優真を見つめる。

優真、あわてて

優真「星亜ちゃんにも会えたし。函館、気持

ちいいところだし。食べ物もおいしいし」

美葉「それから？」

優真「それから……内緒っすよ。美葉さんに

会えたし」

美葉、笑う。

優真「さっき言ったっすね」

萩原がスマホを耳に当てたまま、ペラ

ンダに出て来る。

萩原「ごめんなさい、高倉さん、お会いしたくないって。お話しする？」

優真、萩原からスマホを受け取ると耳に当てる。

優真「もしもし」

○ラッキーピエロ・外観

○同・店内

優真と美葉、星亜が席に着き、食事をしている。優真は勢いよく食べている。

美葉と星亜は優真を見ているが、ちらっと目くばせする。

美葉「高倉さんと何話したの？」

星亜「聞きたい」

優真「父親のこと聞かれて。どんな人だったかって。どんなか、割とよくいるタイプのサラリーマンっていうか、毎日会社に行って、週末は仲間と飲みに行って、日

曜日は接待ゴルフ、最後は一人暮らししててて心筋梗塞」

優真、ナイフとフォークを置く。

優真「そしたら『それは私の知っている裕司じゃない。あなた、本当に裕司の子どもなの？』って。なんか言い方バカにしてんねん。『じゃあ手紙にあった『私たちの子ども』ってのはなんですか。子どもがいるんですか』って聞いたら、『知らない人にそんなこと話せません』やて！」

優真、憤慨したようにあたりを見回す。

優真「わざわざ北海道まで来てんのに、もうちょっと言い方あるんちゃうん」

優真、息を吐いて

優真「これが函館の女か」

美葉、落ち着いて

美葉「いつ帰るの、神戸？」

優真、モグモグしながら顔を上げて

優真「これ食べたら」

美葉、顔色を変える。

星亜「え。そんな急に？」

優真「チケットとれるかわかんないですけど」

美葉、おしぼりを優真の顔に投げる。

優真、驚いて

優真「え？」

美葉、立ち上がり、

美葉「じゃあ、私ここで。短い時間でしたが」

足早に去る。

呆然と見送る優真。

星亜、おしぼりを優真に投げる。

星亜「函館の女なめんな」

優真、おしぼりをとってため息。

頭を下げる。

優真「ごめんなさい」

星亜「美葉さん、こんなに付き合ってくれた

のに、最後怒らせるなんて」

優真、黙っておしぼりをいじっている。

優真「たぶん、ほんとはけっこう期待してた

んかもしれん。親父の愛してた人を見た

いっというか」

星亜「会えなくてがっかりしたのかもだけど、私らに当たらないでよ」

優真「ほんまごめん」

星亜「三紗代さん、どんな声の人だった？」

優真「落ち着いた声してはったな。あー、お
かんと正反対の声やった」

星亜、何かに気づき、すごい勢いで食
べ始める。

優真、驚いて見ている。

優真「どした？ 急に」

星亜、食べ終わり、

星亜「口に入ったまま」ごひようはま」

星亜、出て行く。

優真「おい」

啞然として顔を見合わせる優真。

その肩に手が置かれる。

優真、見上げると美葉が立っている。

× × ×

食事は下げられ、コーヒーが優真と美
葉の前に置かれている。

優真「嫌な気分になんて堪忍な」

美葉「許さないって言ったなら、ずっと函館に
いてくれる？」

優真、美葉を見る。

美葉「うそ」

優真「びっくりした」

美葉「すごい顔してた」

優真「そら、ドキッとしたもん」

美葉「ドキッとさせたかった」

優真「かなんなあ」

美葉、ニコニコしている。

優真「ちょっと、うちのおかんの話してい
い？」

美葉「どうぞ」

優真「おかんね、許さへん女やったんすよ。

おとんと喧嘩して、絶対許さへん。口も

きかへん。おとんが謝っても許さへん。

あれは、子どもながらしんどかったなあ。

何度心の中で「おかん、もう堪忍したり

いよ」って思ったかわからん。せやから、

同じ男として、おとんに同情してます」

美葉、コーヒを口にする。

優真「もしおとんが高倉さんと間違いを起こして、子どもがいたとしても俺は責めようという気持ちはさらさら無くて、むしろおとんを受け止めてくれてありがとう、って言うのは綺麗すぎるかな」

美葉「ううん」

優真「美葉さんは同じ女性として、高倉さんのことどう思いますか？　ってわからんすよね」

美葉「反省してる」

優真「反省？」

美葉「私も許せない女だから」

優真、コーヒを飲む。

美葉「気になる人はずっと横にいてくれなきゃ許せないの。ずっと愛してくれなきゃ許せない。重いよね。わかってるんだ」

美葉、優真を見る。

優真「間違っていないんちゃう？」

美葉、優真を見つめて

美葉「知らないでしょ、私のこと」

優真も美葉を見つめる。

優真「ほんまそれ」

美葉「危ない。納得しそうだった」

優真「ごめんな」

美葉『じゃあ、教えてよ』

優真「うん？」

美葉『じゃあ、教えてよ、あなたのこと』
つて言うの、ここは」

優真、美葉を見つめる。

美葉、優真を見つめ、薬指の指輪に視線を移す。

美葉「忘れてた」

優真、うなづく。

美葉、苦笑いして窓の外を見る。

美葉「私、あなたのお父様の恋人だったらよ
かったな」

優真「どうして」

美葉「そしたら、あなたが私を探しに来てく

れるじゃない」

美葉、優真を見る。

優真、落ち着かない。

美葉、ふと優真の前髪に手を伸ばす。

優真「え？」

美葉「ゴミがついてる」

優真「あ、さっきの」

美葉、身を乗り出して優真にキスをする。優真、目を丸くする。

美葉「怖いでしょ、函館の女」

優真「はい。怖いです」

美葉、笑いながら窓の外に目をやり、急に立ち上がる。

優真「え？」

窓の外で星亜が廣田に腕を掴まれ、抵抗している。

あわてて外に出ていく優真と美葉。

○道

星亜が廣田に腕を掴まれている。

廣田「星亜、話を聞けよ」

星亜「知らない！」

優真と美葉が駆け付ける。

美葉「乱暴はやめて！ 星亜ちゃん、お腹に

子どもがいるのよ！」

廣田「俺、何もしてねえよ。星亜と話そうと

しただけだしって、え？ 子ども？」

星亜、怒鳴る。

星亜「あんたと話すことなんか何もない！

このDV！」

廣田「殴ったことないだろ？」

星亜「クッション投げたじゃん」

廣田「あれはおまえが投げたクッションを投

げ返したんだろ？」

美葉「星亜ちゃん、ちよっと落ち着いて。お

腹の子に触るから」

美葉、星亜をなだめる。

廣田、途方にくれた顔で

廣田「星亜、お腹に子どもいるの？ なんで

言わないの？」

優真、廣田を見る。

星亜、黙っている。

美葉「ひょっとして星亜のお腹の子の父親って」

星亜、泣いている。

廣田「俺？」

星亜「あんたしかいない！このクソDV」

美葉「星亜ちゃん」

廣田、タジタジとなるが、

廣田「俺が父親なら落ち着いてちゃんと話してくれよ、星亜」

星亜「何を？聞くつもりもないくせに」

廣田「聞くなって」

優真のスマホが鳴動する。

優真、少し離れて出る。

優真「はい。ああ、公会堂の。先ほどはお世話になり……えっ、それってどういう。

ほんまですか？」

優真、美葉と星亜に

優真「三紗代さんが、会ってもいいって」

美葉、がんばれとジェスチャー。

美葉「ここ大丈夫だから、行ってきて」

優真「でも」

美葉「大丈夫。(廣田をさし)この人、子ども好きなのよ。心の中でめっちゃ喜んでるはず」

星亜、廣田を目を丸くしてみる。

優真、うなずいて走って行く。

美葉と星亜、優真を見送る。

美葉、星亜と廣田を店に誘導する。

美葉「中、入ろうか。ちゃんと話そう。大事なことだから」

○道

市電が走っている。

○市電・内

優真が乗っている。

揺られながら窓の外に目をやる優真。

○函館どつく・裏門前

閉まった門から中を伺う優真。

三紗代がバイオリンケースを持って歩いてくる。

優真、三紗代に気づく。

三紗代「こんにちは」

優真、頭を下げて

優真「わざわざすみません」

三紗代、首を振り

三紗代「函館どつく、すぐわかりました？」

ホットドッグ屋だと思いませんか？」

優真「あ、俺、神戸なんで、神戸も造船あるんで、はい。わかりました」

三紗代「神戸」

三紗代、しみじみと優真の顔を見る。

優真「親父に似てます？」

三紗代「よく似てる」

優真「やっぱり、そうなんや。俺、自分ではちっとも似てへんって思ってた。子ども言うて信じてもらえるかな」

三紗代、優真の頬に手をあてる。

優真「……って」

優真と三紗代、しばし見つめ合う。

三紗代、手を放し、首を振る。

三紗代「ごめんね。裕司が帰ってきたのかと

思っ

三紗代、優真から離れる。

優真「死にました」

三紗代、振り向く。

優真「親父、死んだんです」

三紗代「聞きました。(耐えるように)もう

一度会えるかと思っ

た。優真「失礼ですけど、親父とはどういう」

三紗代、黙っている。

優真「その、」

三紗代「交流がありました」

優真「交流」

三紗代「(うなずいて)魂の交流」

三紗代、微笑む。

三紗代「ちょっと、ついてきてもらっていい

かしら？」

三紗代、歩き出す。

優真、後を追っていく。

○市電・内

三紗代と優真が並んで座っている。

○道

「谷地頭行」と表示された市電が走っている。三紗代と優真が乗っている。

○谷地頭駅・ホーム

市電から降りる三紗代と優真。

バイオリンケースを持ち、歩き出す三紗代の後についていく優真。

○坂道

バイオリンケースを持ち、坂道を歩く

三紗代。

後ろからついていく優真。

三紗代、立ち止まり振り返る。
優真を見て微笑む三紗代。

○墓地

海をのぞむ墓地。墓の前で三紗代が手を合わせている。

三紗代「兄の墓なの。兄は函館には仕事が無
いって、東京に行って、十年後お骨にな
って帰ってきた」
優真、手を合わせる。

○坂道

三紗代と優真、坂道を歩いていく。
目の前に立待岬が見えてくる。
絶景に足を止める優真。

○立待岬

崖の上でバイオリンを奏でる三紗代。
優真、三紗代を見つめる。
やがて演奏が終わると三紗代はバイオ

リンを下ろす。

三紗代「裕司と初めて会ったのは兄が死んだ日だった。兄のために演奏しようと思っ
てここに来たら裕司が先にここに来てた。
彼、死のうとしてた」

優真、三紗代を見つめる。

三紗代「私、すぐにわかった。この人はもう
終わりにしたいんだって。そういう顔を
してた。だから私、兄じゃなくて、あな
たのお父さんのためにバイオリンを弾い
たの。この世の聞き納めに」

三紗代の髪が風にあおられて舞い上が
る。

優真はただ彼女を見つめ続ける。

三紗代「引き止めなかった。だってお父さん
は死にたかったから。そして私も死にた
かった。だからバイオリンを弾いた。演
奏が終わったとき、二人ともなぜか生き
てた」

優真「父は、なぜ死のうと」

三紗代「よくは知らないの。あなた、お名前前はなんと？」

優真「辻優真です」

三紗代「おいくつ？」

優真「37です」

三紗代「あの頃の裕司くらい。その時、もうあなたが生まれていて。よくは知らないけれど、ご両親の商売が失敗して、億の借金があるって」

優真「そうなんですか？ 億の借金？」

三紗代「仕事に借金に自分の家族、ご両親の生活まで自分の肩にかかってきて辛かったんじゃないかしら。気づいたらここにいたって笑ってたわ」

優真「全然知らなかった」

優真、青い顔をしている。

三紗代、なぐさめるように

三紗代「一人の人間が背負える量って限りがあるわよね。どんな立派な人でも」

優真「父はあなたと？」

三紗代「彼はね、探してたの。息をつける場所を。私とはそういう関係では」

○三紗代の家

小さな一軒家。

○同・居間

三紗代が優真の前に一体の大きな人形を持ってくる。

人形は髪を結われ、化粧を施され、綺麗な服を着ている。

三紗代「これが私たちの子ども」

優真、怪訝な顔で人形を受け取る。

優真「人形？」

三紗代「私たちの愛」

怪訝な顔の優真に三紗代、

三紗代「あるいはマグマ」

優真「どういう意味ですか」

三紗代「あの日、私たちは知り合って、そこからずっとお酒を飲んで、眠って、起き

てまたお酒を飲んで、語り合った。ムクゲの仲間にも入れてたくさん喋ったけれど、あの人は自分の本質に気づいていた。自分の中の地下通路、奥底に眠るもの、噴出させたいマグマ。ごめん、裕司、話すね。あなたのお父さんは」

三紗代、優真の耳元にささやく。

優真、ギョツとした顔をして、体を離す。

優真「待って。ないわ。それはない。こう言うたらあれやけど、俺が高校の文化祭で女装したらめっちゃ怒りはってん。気持ち悪い言うて」

三紗代「髪を長く伸ばしたい。綺麗に化粧をしたい。スカートを履いてみたい。足を出して高いヒールを履きたい」

優真「嘘や！ それはおとんと違う。おとんはそんなヤツやない。違う人ちゃいますか。違う人や」

三紗代「あなたがどう言おうがそれが本当の

彼だった。彼の本質だった。少なくとも、
ここでは、あの人はあの人らしくしてい
た」

優真「絶対に違う。それはあなたが弱ってい
るおとんにつけこんで、意のままにした
だけや」

顔を真っ赤にしている優真。

優真、ふと気づいて人形を見る。

人形を見て、黙る優真。

三紗代は落ち着いて優真を見る。

三紗代「そういう話は聞きたくないってこと

ね。いいわよ、どんな話が聞きたい？

私とのロマンスがお望み？」

優真「父と関係があったんですか？」

三紗代、立ち上がり、写真を持ってく
る。

そこには長い髪の父の姿。

思わず払いのける優真。

三紗代「痛い」

優真「ごめんなさい。でもやめてください」

三紗代、写真を拾い上げる。

三紗代「お父さん、綺麗だったのよ。私がメイクして、服も用意してあげて、二人で顔を並べて鏡に映ったわ。あの人、喜んで、私のこと『愛してる』って言ったの」

優真、つぶやく。

優真「だったら、ずっとここにおいたらよかったんや」

三紗代「あの人は一瞬捨てたのよ、あなたたち家族を。あなたのお母さんに手紙を書いたはず、『帰らない』と」

優真、三紗代を見る。

三紗代、古い封筒を持ってくる。

三紗代「これがお母さんからの返事」

裕司宛の封書、裏に母の名前。

封筒の中から半分に折れた赤のクレヨンが出てくる。

優真、震える指でクレヨンに触れる。

優真「ああ（泣く）」

優真、泣きながらクレヨンを握りしめ

る。

優真「これは俺のクレヨンや」

○三十年前の三紗代の家

折れたクレヨンを前に呆然とする裕司

(36)。目から涙が零れ落ちる。

裕司を抱きしめる三紗代(31)。

○現代の三紗代の家

紅茶をいれる三紗代。

折れたクレヨンを前に黙っている優真。

三紗代、優真に紅茶を出しながら

三紗代「私は『行かないで』って言った。で

も、折れたクレヨンにはかなわなかった。

彼はある日いなくなり、クレヨンだけが

ここに」

三紗代、クレヨンを優真に渡す。

三紗代「もしかしたら戻ってきてくれると思

ってお守りのように持っていたんだけど。

これはあなたにお返しするわ」

三紗代、人形に語りかける。

三紗代「裕司くん、帰って来なかったねえ。

ママのこともえまちゃんのこと忘れちゃったんだねえ、きっと」

優真「えまちゃんって言うんですか、その子」

三紗代「きつとここでのことは忘れて、裕司

くんは裕司くんなりの幸せをご家族と築いたのね。幸せだったなら、よかった」

三紗代、優真に微笑む。

優真「幸せやなかった、あの人は。おとんと

おかんはずっと喧嘩が絶えなくて、最後は別れはったし。おとんに至っては孤独死や。あの人はここにおいたらよかったんや。ずっと自分を欺いて。欺瞞や」

優真、封書を出して三紗代に渡す。

三紗代、優真を見る。

優真「出せなかったみたいですよ」

優真、立ち上がり一礼して出て行く。

三紗代、封書を見つめる。

N 裕司「ご無沙汰しております。三紗代様、

お元気でしょうか。長い間、手紙を書かなかったことお許してください」

○市電駅

ホームで市電を待つ優真。

N 裕司「あれから僕は蓋をして生きてきました。蓋の上に蓋をして、さらにその上に土を盛って、自分の奥底に眠るマグマが噴出しないように注意してきました」

○三紗代の家

手紙を読む三紗代。

N 裕司「私は嘘をつかず仕事をして、嘘をつかずに人に接してきました。しかし、あの函館の日々を思い出し、あなたのことを思い出すと、私はなんと嘘つきで残酷な人間であるをつくづく落ち込みます。気づかれるのは嫌だ、気づかれて後ろ指さされるのが嫌だ。しかし正直なところ、自分は誰かに告発されて、死刑にされた

気持ちです」

○市電・車内

座って電車に揺られる優真。

N 裕司「卑怯者だ、私は。妻も子も親も、そしてあなたさえも欺いて、どうして私は生きているのだろうか。いや、それが罰なのだ、卑怯者の私はただ生きて、ただ生きる事が罰なのでしよう」

○三紗代の家

涙を流しながら人形を抱きしめる三紗代。

N 裕司「僕はありのままの僕を愛してくれるあなたを愛した。そして捨てた。僕はその日から屍なのです。あなたがもし僕を思い出すのなら、朽ちた死体を思ってください。僕たちの子どもは元気ですか。元気ならばうれしいです。裕司」

三紗代に抱きしめられている人形の瞳。

○「小奴」店内

椅子に座る美葉と優真。

美葉「そう、人形だったの。『僕たちの子ども』は」

優真「びっくりするわ、もう」

美葉「まあ、よかったじゃない。解決して」

優真、ふてくされてる。

美葉、優真に微笑んで

美葉「スッキリしない顔ね」

優真「なんか、こう、そうね。俺のこと冷たい人間やと思わんでほしいねんけど、ちよっとおとんに対して気持ちが冷えたっ
ていうか」

美葉「どうして？」

優真「おとん、俺ら家族を捨てて、自分だけ幸せに暮らそうって一時でも考えたんや
って言うのが、俺の中で許されへん」

美葉「そう」

優真「俺もまだ小さくて、おかんもいて、じ
いちゃん、ばあちゃんもいて、支えなあ

かん人いっぱいおんのに、なに自分ばかり自由になろうとしてんねん！　っておとん生きてたら言ってたわ」

美葉、優真を見て

美葉「怒ってるの？」

優真「怒ってるよ。家族に対する裏切りや。

俺は裏切るヤツがこの世で一番許せない

ねん」

カウンターを叩く優真。

美葉、優真を見る。

優真、叩いた手をじっと見る。

気まずそうに

優真「ごめん」

入り口の戸が静かに開き、星亜と廣田が入ってくる。

静かにカウンターの椅子に座る二人。

優真と美葉、顔を見合わせる。

○道

二台のタクシーが走っていく。

○ タクシー車内

優真と美葉がうれしそうな顔で乗っている。

二人、同時に後ろを振り返る。

○ 立待岬

美葉、タクシーから降りる。

海を見て岬の方に走っていく。

感嘆の声をあげる。

美葉「綺麗。広い」

優真、後からタクシーを降りて、

微笑んで美葉の元へ歩いてくる。

優真と美葉、並んで海を見る。

○ 海

立待岬からの眺め。

遠くに本州がうっすらと見える。

○ 立待岬

海を見つめる美葉と優真。

美葉「向こうが本州なのね」

優真「おともも昔、こうやって眺めてたんや

るか」

美葉、優真を見る。

タクシーのドアが開く音。

美葉と優真、振り返る。

タクシーからカメラマン、タキシード

を着た廣田とウエディングドレス姿の

星亜が降りてくる。

美葉、星亜のドレスを助けてやる。

星亜、海を見て感激した顔で

星亜「きれい」

はしゃぎまわる星亜をあきれ顔で見る

廣田。苦笑する美葉と優真。

× × ×

カメラマンが星亜と瞬を撮影している。

カメラマン「はい、次はお姫様抱っこしてみ

ましようか」

星亜、廣田の首に手を回しながら不安

そうに

星亜「赤ちゃんいるから、絶対落とさないでね」

廣田「わかった！」

笑顔の廣田。

カメラマン、笑顔で

カメラマン「いいですねえ。こっちにお願いください！」

美葉と優真、顔を見合わせる。

美葉、そっと優真に腕をからませる。

優真、美葉を見る。

星亜と廣田、幸せそうに抱き合っている。

○ 同（夕）

星亜と廣田がタクシーに乗り込む。

優真は海を見つめている。

美葉、優真を見ているが、

タクシーに乗り込む。

タクシー、優真を置いて発車する。

○同（夜）

函館の夜景。

海を見ている優真。

三紗代がいる。

三紗代「私ね、兄を愛していたの。温和で優しい人だった。小さい頃から可愛がってくれて、だから兄が東京へ行くと言った時は絶望したの。でもいつか帰ってくると思ってたから。まさか骨になってくるとはね」

優真、三紗代を見ている。

三紗代「絶望の先にまだ絶望があって、苦しくて。だから死のうと思った。あなたの
お父さんも」

優真「あなたはおとんのことを理解したのか
もしれんけど、俺は三紗代さんちゃう。
俺は正直、おとんのがわからん。理
解できひん。でもそれでも仕方ないと思
う。親子かて、別の人格やし」

三紗代、海を見ている。

優真「人なんて、所詮理解されんのんとちが
いますか。そや、理解してもらおうと思
うからがっかりすんねん。最初から理解
できないもんやと思えば」

三紗代「そう」

優真、もどかしそうな顔をする。

三紗代「泳ぎの得意な人ならここから本州ま
で泳いでいける？」

優真「さあ。無理ちゃいます？ それって函
館の人の方が知ってるんちゃいますか？」

三紗代「きつと何人もが泳いで渡ろうとして
沈んでる」

優真「そんなアホな人、おらんでしょ」

三紗代「きつといる。クレヨンを食べようと
する人もいるくらいだし」

優真「クレヨン？」

×

×

×

封書の上に置かれた折れたクレヨン

×

×

×

優真、三紗代を見る。

優真「クレヨンを食べるって誰が？ おとんが？ それとも」

三紗代「食べてしまえば、帰らなくてよかったのにねえ。そしたらここで幸せに暮らせたのにねえ。残念だったね、裕司くん」

優真、こぶしを握り締めて

優真「食べたたらよかったやん」

三紗代、微笑む。

優真「食べてしまったらよかったんや。そして帰ってこなかったらよかったんや。そやろ、俺の、子どものせいにすんなや。自分で選んだ道やろうが！」

優真、ポケットからクレヨンを出す。

優真「食えよ！ あの時、食えなかった分、食ったらええやんか！ 食って食って、食いまくれよ」

三紗代は怒りに震える優真の手からクレヨンを取り、じっと見る。

三紗代「食べたたら帰ってくる？」

優真、我に返る。

三紗代、クレヨンを食べる。

優真、三紗代から取り上げようとし、口からクレヨンを出させようとする。

優真「やめ。あかん、食べたら。出して。ごめん、出して」

クレヨンを吐く三紗代。

優真「ごめんなさい。どうかしてたわ、俺」

三紗代「帰ってきてよ」

優真、三紗代を見る。

三紗代、優真に辛そうに。

三紗代「帰ってきてよ。ねえ。なんで、置いていったの」

優真「三紗代さん」

三紗代「裕司」

三紗代、優真にキスをする。

優真、受け止める。

三紗代、優真の顔を見て

三紗代「愛してたの。彼を愛してたの。彼を理解すると言って、裏切ったの。愛して

しまったの。抱いてほしかったの」

三紗代、立ち上がりフラフラと歩き出す。

三紗代「ごめんね、裕司くん。私、ほんとはあなたのこと、何も知らない、何も知らなかったの」

三紗代、歩き去る。

優真、三紗代の後ろ姿をずっと見送っている。

○函館空港

美葉と優真が別れを惜しんでいる。

美葉、お土産を手渡し、

美葉「はい、これが北海道特産のポテトチップス、こっちがお子さんに花畑牧場のキヤラメル、そして忘れちゃいけない「白い恋人」！」

優真「わー、こんなにたくさん、ありがとう」

美葉と優真、笑顔。

連れ立って歩き出す。

美葉「ねえ、函館に来てよかった？」

優真「うん。よかったよ。おとんのこととはま

あ、あれやけど、あなたにも会えたし、

星亜や函館の人たちにもお世話になった

しなあ」

美葉、優真に向き直り、

美葉「函館のこと、いつか夢に見たりする？」

優真「夢は、そやな、いつかわからんけど、

見るよ。絶対見ると思う」

美葉「うなずいて」その時はデートして」

優真、首をかしげ困った顔をする。

美葉、おかしそうに

美葉「夢の中でもダメ？」

優真「せやかて、夢の中で我慢できなくなっ

たら困るやん。やから、我慢しとくわ。

夢の中でもお友達で」

優真、片手を差し出す。

美葉、握手をする。

優真、美葉を引き寄せ抱きしめる。

優真「おっと、手がすべった」

美葉、体を離し怒った顔をする。

美葉 「またのお越しをお待ちしております」

優真、ニッコリ笑って手を上げて去る。

美葉、微笑んで背中を向け歩いていく。

× × ×

スマホで電話しながら歩く優真。

優真 「もしもし、さやか？ これから飛行機

乗るから。うん。おとん？ うん、なん

か結局わからなかったわ。そう。わから

んかったってことがわかったって言うか。

まあまあ、ええやん。なんもなかったん

やから。お土産もあるし許して」

優真、笑顔で歩いていく。

通りすがりの親子連れがクレヨンを落

とす。散らばるクレヨン。

隅に折れた赤いクレヨンが落ちている。

（終わり）